

重点目標	具体的取組	評価の観点	現状の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の取り扱い（改善策等）
<p>1 生徒自身が自己の目標を見据え、課題に対して主体的・継続的に取り組む姿勢を養う。</p>	<p>① 進路選択に係る講話や体験活動等とおして、キャリア意識の向上を促す。</p>	<p>【成果指標】 生徒各自が目標を達成できた。</p>	<p>アドバンスクラス 模試偏差値</p> <p>模試における英数国合計の偏差値が 55 以上の生徒が受験者の</p> <p>A. 50%以上 B. 40%以上 C. 30%以上 D. 30%未満</p> <p>ベーシッククラス 漢字検定</p> <p>漢字検定準二級保持者の割合が</p> <p>A. 50%以上 B. 40%以上 C. 30%以上 D. 30%未満</p> <p>キャリアコース 商業検定</p> <p>商業各種検定合格率が</p> <p>A. 75%以上 B. 65%以上 C. 55%以上 D. 55%未満</p>	<p>アドバンス 〔1月模試〕 1年 D (27%) 2年 A (50%)</p> <p>ベーシック D (15%)</p> <p>キャリア A (89%)</p>	<p>成果：朝学習などの取組を進めた結果、良好な学力を維持している。特に2年生の学力の伸びが著しい。</p> <p>課題：過去実施問題の解答・解説など丁寧に指導をしており、結果は良好であるが、受け身の学習姿勢が見られる。自主的かつ積極的な学習姿勢を育む必要がある。</p> <p>改善策：学年団を中心に努力しているが、生徒の自主的かつ積極的な学習姿勢を引き出せるよう、生徒の意識向上を図る必要がある。</p> <p>成果：朝学習において、年間をとおして週1回小テストを行い、結果をグラフにして掲示するなどにより、検定合格への意欲を高め、継続的に学習することができた。</p> <p>課題：昨年度には行わなかった第2回検定を実施できたが、受検して合格しようという生徒の意欲をさらに喚起し維持することが、今後の課題として挙げられる。</p> <p>改善策：漢字検定の開催は年3回であり、限られた受検機会の中で生徒の意欲を喚起するために、中・長期的な計画に基づいて対策を行い、価値の意識付けをし、その都度検証する。</p> <p>成果：各検定合格率総平均89%と高い割合の結果を出すことができた。また、補習や個別指導が計画的に実施できた。</p> <p>課題：1級合格者の割合を高めるなど、より高い目標を持たせていくことが課題である。</p> <p>改善策：目標設定時に3年間を見通した計画を持たせ、自ら主体的に資格取得に取り組めるよう工夫する。</p>

重点目標	具体的取組	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の取り扱い（改善策等）
1 生徒自身が自己の目標を見据え、課題に対して主体的・継続的に取り組む姿勢を養う。	② 習熟度(類型)別の授業・補習や学習課題等とおして、自ら学ぶ意欲を高める。	【満足度指数】 各クラスの1日の学習平均時間(各定期考査までの期間)が アドバンスクラス 2時間以上 ベーシッククラス 1時間30分以上 キャリアコース 1時間30分以上	各クラス(コース)において基準を達成した生徒の割合が A. 70%以上 B. 60%以上 C. 50%以上 D. 50%未満	アドバンス C (55%) ベーシック D (15%) キャリア C (52%)	成 果：前回と比較して、全てのコースで達成割合が増加した。アドバンス(前回43%)とキャリア(前回32%)で50%を超えた。また、ベーシック(前回2%)も値は低いが増加した。少しずつ、家庭学習が定着している。 課 題：2学期以降は、受験や資格に向けての学習時間が増加傾向にあるものの、普段の学習に対する家庭学習時間が少ない。必要に駆られる状況でないと家庭学習をしない傾向が見られる。 改善策：課題内容を吟味し、家庭学習の必要性を理解させた上で、継続的に課題を与える。
	③ 教育ICT環境を活用し、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実をおして、確かな学力を養成する。	【努力指標】 ICT研修によってICT機器に習熟し、「GIGAスクール構想」に適った「新たな授業づくり」に積極的に取り組んだ。	ICT機器に習熟し、「GIGAスクール構想」に適った授業づくりに積極的に取り組んだ教員の割合が A. 80%以上 B. 70%以上 C. 60%以上 D. 60%未満	C (62%)	成 果：校内研修計画を基に、GIGAスクール構想に適った授業づくりを推進することができた。 課 題：より効果的なICT機器の活用を常に模索し、授業案や実践例を共有する機会が少なかった。 改善策：各教科や学年を横断した実践例の蓄積を次年度も継続して行い、新しい技術や知識を積極的に取り込んでいきたい。また、朝学習や家庭学習においても一人一台端末を活用した課題などを研究していきたい。
学校関係者評価委員会の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・少人数である環境を最大限に生かし、効果的な教育を行っている。一層、生徒の興味・関心を引き出す教育を行ってほしい。 ・探究学習の成果発表では、生徒の主体的な学びの形成が感じられた。生徒の主体的な学びを、一層引き出し、学習意欲向上に繋げてほしい。 				
評価結果を踏まえた今後の改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・互見授業を年5回行い、教員が参観し合うことで自分の授業に生かす取組を行っている。また、互いに良い面、足りない面を指摘し合うことで改善のヒントを得、一層の資質向上に努めていく。 ・探究活動はその活動をおして生徒がどのように成長するかが大切である。探究の先にある学びや成長等を意識し、目標を明確にしたうえで、探究活動の今後の在り方について再構築する。 				

重点目標	具体的取組	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の取り扱い（改善策等）
2 規範意識と協調性を高め、自他を思いやる心を醸成する。	① 学校内外の日常生活の場面で、TPOを前提とした判断と言動ができるよう支援する。	【満足度指標】 規範意識を持って、自発的に行動することができたと考えている。	自分から主体的にTPOに応じた挨拶ができているか A. よく出来ている B. 出来ている C. あまり出来ていない D. 出来ていない	83% (A+B) A 23% B 60%	成果：生徒の肯定的な回答が80%以上、保護者の肯定的な回答が96%となった。 課題：前回に比べて、生徒のAの回答率が減少し、Bの回答率が増加している。 改善策：挨拶の意義を考えさせ、教員の共通認識の下、普段の生活、授業、部活動などで挨拶を徹底する。また、生徒が主体的に挨拶運動に取り組む仕掛けを工夫する。
	② 学校行事や課外活動をとおして、多様性を尊重しながら協働できる姿勢を養成する。	【満足度指標】 各種学校行事や体験活動により、良好な人間関係を築き上げるとともに、何事にも主体的に他者理解をとおして取り組むことができるようになる。	学校行事をとおして、自他を大切にすることを心を持つようになれたか A. よく持てるようになった B. 持てるようになった C. あまり持てない D. 持てない	88% (A+B) A 30% B 58%	成果：少人数クラスであるため、クラス内で一人一人に役割が与えられ、やりがいを感じる場面が多くあった。そのため、自他に対して思いやりや広い視野を得ることができた。 課題：学年毎の行事が多く、他学年と関わる場面が少ない。そのため、活動集団が固定化してしまうことが多い。 改善策：委員会活動や他学年と関わる行事を生徒会執行部と協力しながら実施していくことで、より多くの生徒が自他を大切にすることを育てられるような場面を作っていきたい。
学校関係者評価委員会の評価		<ul style="list-style-type: none"> ・少人数である利点もあるが、反面、集団で行う活動が限られてくる。集団で行う行事等は人間性育成や良好な人間関係構築に有用なものであるから、それを意識した指導を行ってほしい。 ・ボランティア活動でも生徒たちが協力し合って取り組んでおり、生徒間の人間関係は良好であると感じる。今後も、その環境を大切にしたい。 			
評価結果を踏まえた今後の改善策		<ul style="list-style-type: none"> ・行事等については取組み方を工夫し、生徒が主体的に活動できる場を創出する。また、挨拶においても生徒だけではなく、教員も率先して行うことで生徒に模範を示し、学校全体でその意義を周知する。 ・生徒が主体的に多くの人と関わり、触れ合うことでより良き人間性の育成を図る。活動の目的を明確にし、教員が共通理解を持った上で地域との密な関係の下、地域資源の積極的な活用を行う。 			

重点目標	具体的取組	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の取り扱い（改善策等）
<p>3 地域との交流・連携を密にし、地域を理解し貢献しようとする姿勢を養う。</p>	<p>① 地域資源(自然・人材・団体・企業)や他校種と連携し、地域理解を深め、探究する力を養成する。</p>	<p>【満足度指標】生徒が課題意識を持って、積極的に地域と関わり、地域への理解を深めている。</p>	<p>課題意識を持って、積極的に地域と関わり、地域への理解を深めることができたと考える生徒の割合</p> <p>A. 90%以上 B. 80%以上 C. 70%以上 D. 70%未満</p>	<p>D (66%)</p>	<p>成果：講演会のみならず、前年度と比較して探究学習によって地域の方々との交流の機会が増し、地域理解を深めるきっかけを得ることができた。</p> <p>課題：様々な活動が増えた一方で、それぞれの関連性が弱まり、教育的効果、生徒自身の学びの実感が薄れているのではと感じられる。</p> <p>改善策：生徒の学びや体験による教育効果が、本校の教育目標と照らし合わせて、教員が共通認識の下、系統立った指導を行う。</p>
	<p>② 地域ボランティア等へ積極的に参加し、地域貢献意識を高め、課題解決力を養成する。</p>	<p>【満足度指標】生徒がボランティア活動や地域行事に関わり、地域の活性化に貢献していると感じている。</p>	<p>ボランティアや地域行事に関わり、自己の活動に有用感を感じている生徒の割合</p> <p>A. 80%以上 B. 70%以上 C. 60%以上 D. 60%未満</p>	<p>D (54%)</p>	<p>成果：例年実施している行事の他に、長谷部まつりやボラ待ちやぐらのボランティア、CM作成などの町内のボランティア活動に参加する場面が多かった。そのため学校の活動が認められ、石川県民運動青少年ボランティア賞を受賞することができた。</p> <p>課題：行事が増えたため生徒に対する事前、事後指導を設定することができず、生徒が目的意識を明確化できず、肯定的に捉えていないように感じている。</p> <p>改善策：年間をとおして生徒に対して適切な指導を行えるよう、行事に参加する目的や教育効果を教職員で共通理解できるようにする。</p>
	<p>③ ホームページ等で、教育活動や生徒の様子を積極的に情報発信する。</p>	<p>【満足度指標】ホームページや学校だより等をとおして、適切に学校情報や教育活動の様子が発信されている。</p>	<p>学校情報や教育活動の様子を知ることができる情報発信が、適切になされていると感じている保護者の割合</p> <p>A. 90%以上 B. 80%以上 C. 70%以上 D. 70%未満</p>	<p>A (100%)</p>	<p>成果：修学旅行や部活動などの活動の様子や、登校坂前の立て看板による生徒の活躍などを知らせている。また、メール配信などによる情報提供で、保護者との関係と強めている。</p> <p>課題：多くの情報を提供できたが、技術的な問題で作業が一人に偏り、広く活動の情報を集めて提供することが難しかった。</p> <p>改善策：ホームページ作成要領など、複数で関わることで、負担軽減を図る。また、メール等による情報発信は継続する。</p>
<p>学校関係者評価委員会の評価</p>	<p>・学習活動と課外活動などの調和のとれた指導が大切である。特に、穴水町は自然環境に恵まれており、それを生かした体験的学習が可能であるから、取り入れてはどうか。</p> <p>・情報発信については、ホームページだけではなく、新聞やケーブルテレビなど様々な媒体で積極的に発信している。引き続き、学校全体で穴水高校をPRしようという意識をもって発信してほしい。</p>				
<p>評価結果を踏まえた今後の改善策</p>	<p>・地域資源を最大限に生かして活動を行う。その際、学校の教育目標を明確にし、学際的な系統立った指導の取組を整備する。</p> <p>・ホームページなどの従来の情報発信だけでなく、今後はインスタグラムなどの積極的な情報発信も行っていく。</p>				

重点目標	具体的取組	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の取り扱い（改善策等）
4 学校の教育力向上のため、組織力を高め、教師力の充実を図る。	① 授業改善と資質向上に意欲的に取り組むとともに、組織的思考力や組織的行動力を高める。	【努力指標】 クラス面談、互見授業、カウンセリング委員会等の各種会議が連結し、生徒と教師間、教員組織において課題解決に向けた対応がなされている。	校内の諸課題に対して、組織的対応や外部機関と連携しながら早期対応ができたと考える教員の割合が A. 90%以上 B. 80%以上 C. 70%以上 D. 70%未満	A (100%)	成果：継続的事案には、定期的に経過を把握し、変化に応じて外部機関と連携を図りながら適切に対応できた。また、面談や生徒の相談からの事案に対しても、速やかで適切な組織的対応によって、問題を最小限に留めることができた。 課題：学習や部活動、さまざまな学校教育活動において、問題や異変に対する対応力にプラスして、学校の魅力を高めるための組織的対応や外部機関との連携も必要性が増している。 改善策：個々の教員の授業力改善とともに、学校全体としての魅力を高めるための組織的な行事運営や外部機関との連携力を図る。
		【成果指標】 年間研修計画に即して、研修を実践する。各期の若手が確実に力をつけるとともに若手教員が講師を行う場面を設定する。	校内研修の実施回数（互見授業研究・講師役も含む）が A. 25回以上 B. 20回以上 C. 15回以上 D. 15回未満	A (26回)	成果：2月末までに経験年数に応じた内容で、各学年進路検討会ペアでの互見授業、外部講師によるオンライン研修をカウントし26回実施できた。3月に実施予定の最終研修で27回実施となり、概ね計画通りに進められた。また、課題であった講師の一方通行の講義形式ではなく、受講者が講師を務める研修も数回実施できた。更に、互見授業の振り返りを行い、授業力向上に結びつく研修を実施できた。 課題：地域（穴水町）と連携したフィールドワークを計画していたが、コロナ禍が思った以上に長引き、実施には至らなかった。また、受講者が主体的に活動する機会を設け活動することができたが、回数は少なかった。 改善策：受講者が輪番でコーディネーターを行うことで、主体的に活動する機会を生み出し、学校経営に積極的に関わることを機会を増やし、研修の成果が実践に結びつくようにする。

重点目標	具体的取組	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の取り扱い（改善策等）
4 学校の教育力向上のため、組織力を高め、教師力の充実を図る。	② 業務改善の意識を持ち、効率的・効果的に業務を実践する。	【成果指標】 各種業務の精選や重点化を意識し、教員が効率よく効果的に業務に取り組んでいる。	教員一人あたりの月平均時間外勤務時間が昨年度より A. 10%以上減少した B. 5%以上減少した C. 3%以上減少した D. 3%未満の減少であった	D (2.5%増加)	成果：4～12月の9ヶ月調査で前年度より約2.5%の増加である。しかし、80時間超過勤務者はおらず、県立高校の平均時間よりも5%以上低い数値となっている。 課題：個々の教員の時間外勤務は大きな幅があり、組織として業務を分担しながら効果的に校務運営する必要がある。 改善策：各委員会や課会等を適切に開催し、業務内容をチームで確認、決定し、余裕をもって業務を進められるよう準備、調整を行うようにする。
	③ 危機管理意識を高め、緊急時にも適切に対処できる学校組織を構築する。	【努力指標】 想定される危機に備えた対応や対策ができるよう、効果的な校内研修会が行われている。	研修会により、具体的な危機への対応の仕方が把握できたと考える教員の割合が A. 90%以上 B. 80%以上 C. 70%以上 D. 70%未満	A (100%)	成果：コロナ感染に対しては、日常的に感染予防に努める意識と予防機器の充実等により、校内での集団感染の事例は発生しなかった。その他の不測の事態に対しても、危機管理マニュアルに基づいて組織的に対応することができ、研修の成果があった。 課題：コロナ感染対策や事故、自然災害等だけではなく、生徒の学校生活での人間関係や行動変容等への気づきを、組織として情報共有し対処できる力を高める必要がある。 改善策：個々の教員のカウンセリング能力や、組織的な生徒指導や教育相談の対応力を高める研修等を取り入れる。
学校関係者評価委員会の評価		<ul style="list-style-type: none"> ・時間外勤務については、県内平均時間よりも低いことから、その対策がしっかりと行われていると思われる。今後も継続してほしい。 ・日頃から校内外の連携が確立していると感じる。今後も、危機管理対応などに関する様々な研修の成果を生かして学校運営を行ってほしい。 			
評価結果を踏まえた今後の改善策		<ul style="list-style-type: none"> ・今後も効率的、かつ質の高い業務の遂行を意識し、各種委員会や課会などを最大限活用するなど、一層、組織的な業務を行う。 ・今後は校内の危機管理だけではなく、自然災害やミサイル発射問題など校外における危機管理に対しても視野を広め、どのように対応すべきかを考えて、危機管理能力の向上に努める。 			